

新春落語

落語家 柳亭 楽輔師匠

卓話者紹介 戸部 八郎会員

本名は笹本邦雄。昭和 28 年 1 月 25 日、静岡県生まれ。昭和 47 年、4 代目柳亭痴楽に入門、楽輔となり、その後、師匠が病に倒れたため、三笑亭夢楽の預かり弟子となりました。昭和 51 年、二ツ目昇進、62 年に真打昇進。現在は落語芸術協会理事です。



演題：家事息子（人情噺）

江戸時代の消防組織には、町火消と若年寄直轄の火消屋敷があった。神田の質屋の一人息子の吉三郎は子どもの頃から火事が好きではない。ついには火消しになりたくて町内の鳶頭のところへ頼みに行くが断られ、他所へ行っても鳶頭から回状がまわって来てだめ。仕方なく火消屋敷の火事人足、臥煙（がえん）になるが、体中に刺青をし、勘当されてしまう。

ある北風が強く日に、店の近くから火事が出た。質蔵の目塗りをしようと左官の親方を呼んだがこっちまで手が回らないという。さいわい火元からは風上だが万一、人様の物を預る質蔵に火が入っては一大事と、旦那は高い所を怖がる番頭の定吉を蔵の屋根へ上げ、土をこねて屋根へ放り上げるが番頭は怖がって上手く受け取れない。顔に土が当たって顔に目塗りをしている有様だ。

するとこれを遠くから見ている一人の臥煙が屋根から屋根を伝わってきて、番頭の帯を折れ釘に結んだ。これで両手が使えるようになり、番頭はこれで踊りでも何でもできると喜ぶ。

やっとのことで目塗りも出来上がる。ちょうどその頃、火が消えたという知らせ。そうなる今度は火事見舞いの人たちが入れ替わり立ち替わりやってきて忙しい。橘屋さんからは風邪をひいた旦那の代わりにせがれが来た。思わず自分の息子と比べ羨ましいかざりで思わず愚痴も出る。

そこへやってきた番頭に、さっき手伝ってくれた臥煙にお礼をしたかと尋ねると、番頭は、旦那から直接お礼を言った方が良くと思って引き留めたのですが、旦那には会いたくないと言う。旦那は店に質物でも置いてあるのだろうと思い、質物を返しあげなさいと言うが、番頭は口ごもってははっきりしない。よくよく聞いてみると臥煙は勘当した息子だという。もう赤の他人なんだから会う必要なんかないという旦那を、他人だからこそお礼を言うのが人の道だと諭し、旦那は、それも道理、一目会って礼を言おうと台所へ行く。

台所の隅で役半纏一枚（やくばんてん）一枚で、体の刺青を隠しようもない息子の吉三郎が控えている。お互いに他人行儀の挨拶を交わすが、旦那は息子の刺青を見て、親の顔へ泥を塗るとはお前さんのことだと嘆く。

横から定吉が「旦那さんはさっき番頭さんの顔に泥を塗った」と茶化し叱られる。旦那が「お引取りを」、「それではこれでお暇を」と息子が言うのを番頭が引きとめ、おかみさんと呼ぶ。奥から猫を抱いたおかみさんが出てくる。

おかみさんは、せがれの寒そうな身なりを見て、蔵にしまっている結城の着物を持たせてやりたいと涙ぐむ。

旦那 「こんな奴にやるくらいなら捨てたほうがいい」
おかみさん 「捨てるくらいならこの子におやりなさい」

旦那 「わからねえ奴だな、小遣いの少しでもつけて捨てれば、捨てて行く奴がいるから」

おかみさん 「わかりました。捨てます、捨てます、たんすごと捨てます」

おかみさん 「この子は粋な身装（なり）も似合いましたが、黒の紋付もよく似合いました。この子に黒羽二重の紋付の着物に、仙台平の袴をはかして、小僧を伴につけてやりとうございます」

旦那 「こんなやくざな奴にそんな恰好をさせてどうするんだ」

おかみさん 「火事のおかげで会えたから、火元に礼をやりましょう」



創立 1993年10月13日(平成5年)
例会日 毎週水曜日 12:30~13:30
事務局 〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-2-2
グランドメゾン九段 906 号
Tel: 03-3288-7300 Fax: 03-3288-7400
<http://tokyo-orc.jp/> E-mail: ocha-rc@sirius.ocn.ne.jp

例会場 ホテルグランドパレス
Tel: 03-3264-1111
会長: 永井 一史 幹事: 西村美智子
会報委員長: 松島 健
会報委員: 木村・木宮・佐々木・八木・山下